

令和5年度第2回東久留米市総合教育会議議事録

令和5年11月10日

東久留米市・東久留米市教育委員会

令和5年度第2回東久留米市総合教育会議日程

令和5年11月10日（金）午前9時00分開会
市役所7階 703会議室

【議 題】

（大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所所長、前京都大学総長、
霊長類学・人類学者である山極壽一氏をお招きし、市長・教育長・教育委員との意見交換
会及び講演会を実施）

（1）意見交換会

（2）講演会 講師：山 極 壽 一 氏、 演題：「人間にとって学びとは何か」

出席者（6人）

市	長	富 田 竜 馬
教 育	長	片 柳 博 文
委 員 (教育長職務代理者)		宮 下 英 雄
委 員		尾 関 謙 一 郎
委 員		馬 場 そ わ か
委 員		植 村 芳 美

東久留米市教育委員会会議規則第13条の規定に基づき出席を要求した者の職氏名

副 市 長	荒 島 久 人
企 画 経 営 室 長	佐々木 弘 治
市 民 部 長	森 山 義 雄
環 境 安 全 部 長	長 澤 孝 仁
教 育 部 長	小 堀 高 広
指 導 室 長	小 瀬 ま す み
教 育 総 務 課 長	田 中 徳 彦
学 務 課 長	田 口 純 也
生 涯 学 習 課 長	島 崎 修
図 書 館 長	島 崎 律 照
主幹・統括指導主事	森 山 健 史

事務局職員出席者

教育総務課庶務係長 鳥 越 富 貴

傍聴者 24人

◎開会及び開議の宣告

(開会 午前9時00分)

- 富田市長 おはようございます。これより令和5年度第2回東久留米市総合教育会議を開催します。
-

◎傍聴の許可

- 富田市長 傍聴の許可に入ります。傍聴の方はいらっしゃいますでしょうか。
(「いらっしゃいます」の声あり)

それでは、お入りいただきます。

(傍聴者 入室)

傍聴の皆様おはようございます。皆様にお願ひがあります。傍聴に当たりましては、教育委員会の傍聴人規則に準じていただきます。動画撮影及び録音についてはご遠慮いただきますようお願いいたします。

◎本日の進め方

- 富田市長 さて、多くの方がメディア等で既によく顔を拝見されていると思いますが、本日の総合教育会議には、霊長類学・人類学者である山極壽一先生をお招きしました。山極先生は、現在、京都にある大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所の所長でいらっしゃいまして、2014年10月から2020年9月までの6年間は京都大学の総長の役職に就いておられました。

先生は大変ご多忙でして昨日は都内の会議に出席され、本日も午後3時過ぎには京都で開催される会議に出席しなければならないそうです。しかし、午前中の1時間半ぐらいであれば何とか都合がつくかもしれないということで、昨年から事務局が研究所と交渉を続けさせていただきました。

総合教育会議はこれまで20回以上開催していますが、本日は間違いなく大変貴重な機会になると思います。限られた時間ですが、2部構成の中でいろいろとお話を伺いたいと思っています。まずは総合教育会議のメンバーと意見交換をしていただき、その後、短時間ですが講演をしていただく予定となっています。

(1) 意見交換会

- 富田市長 改めまして、本市の総合教育会議のメンバーをご紹介します。片柳教育長です。
○片柳教育長 片柳です。よろしく申し上げます。
○富田市長 教育長職務代理者の宮下教育委員です。
○宮下教育委員 宮下です。よろしくお願い申し上げます。
○富田市長 尾関教育委員です。
○尾関教育委員 尾関です。よろしくお願い申し上げます。
○富田市長 馬場教育委員です。
○馬場教育委員 馬場です。今日はとても楽しみにしていました。よろしくお願い申し上げます。
○富田市長 植村教育委員です。
○植村教育委員 よろしく申し上げます。
○富田市長 山極先生はゴリラやオラウータン、チンパンジー、人間などの生態から世の中の事象について分析されていらっしゃいまして、最近では一般紙やテレビ等で山極先生が

コメントされている場面を多くの方がご覧になられていると思いますし、私も拝見しています。講演では「人間にとって学びとは何か」と題してお話を伺いますので、この前手の意見交換では講演を拝聴するまでのウォーミングアップと言いますか、あえてほかの視点から先生のご見解を伺っていきたいと思います。

それでは最初に発言していただくのにふさわしいエピソードをお持ちの、馬場委員からお願いします。

○馬場教育委員 はい。ここにいらっしゃる皆さんに、私は自慢したいことがあります。

実際に先生にお会いするのは今日が初めてですが、私は小学生の時に、先生にお手紙を書いたことがあります。幼かったため、そんな大事なことを長い間忘れていたのですが、一昨年の教科書採択の時、道徳の教科書でしたが、山極先生のお書きになったこの『森の巨人』という本が教科書に載っていたんです（絵本を掲げる）。「あっ!」と思い出して実家に行ったらこの本がありました。

当時、先生は日本モンキーセンターに勤められていたころで、アフリカで活動されていたテレビ番組を見てとても感動しました。小学生の当時、私も将来はアフリカに行って自然と動物の保護活動をしたと思っていましたので、食い入るように見ていました。

手紙を書いてからしばらくして、山極先生から、このサイン入りの—今日も「スマホを捨てたい子どもたち」にサインをいただきましたが—大判の本とお手紙も書いてくださっていました。親は小学生の私が一人で手紙を書いて投函までしたことを初めて知って、とても驚いていました。もちろん本もお手紙も実家で大事に保管しています。この本は娘たちにも読んであげていました。文章も当時の先生が書かれていて、写真もご自身で撮られています。40年前の青年時代のお写真も載っています。

40年前のアフリカで早くも自然破壊があったなんて小学生の私は思いもしなかったのですが、アフリカでも自然保護が困難な状況が発生していたそうです。先生が調査で追っていたあるゴリラの群れが森から追いやられて消滅してしまうという話ですが、絵本の写真を見ても、緑が溢れて一見豊かに見えるその森が、既にゴリラたちが生きられない場所になっているということがとても衝撃的で、地球に大変なことが起こっていることを子どもながらに痛切に感じたことを思い出しました。

なぜ、いま自然保護活動をしていないのかもお話します。私はたくさんの動物を飼っていたのですが、その中でウサギがたくさん子どもを産みました。ウサギは人間に自分の子どもを見られたくないので、親が子ウサギを噛むんです。子ウサギが血だらけになって死んでいるのを見て、私はかわいそう過ぎて埋めることができず、親に頼んでいました。私は自分の生命への向き合い方に対する弱さを知ってとても落ち込み、自然保護活動はできないと実感し、アフリカに行く夢は断念しました。しかし、今でも自然を守りたい、動物を愛おしく思う気持ちは変わらず持ち続けています。

今年の7月ごろ、事務局から「総合教育会議に山極先生をお招きできるかもしれないですよ」と聞いて、「えっ」と驚きました。本当に今日の日を迎えられてうれしく思っています。講演をお聞きするのを楽しみにしています。

○富田市長 先生、ご記憶はありますか。

○山極先生 おそらくタモリさんの「ウォッチング」という番組だったと思いますが、「生きもの地球紀行」という番組だったかもしれません。モンキーパーク時代に、何回かテレビで報道されたことを覚えています。

○富田市長 しかし、驚きますね。そんなご縁がおありだったとは。ありがとうございます。

続いて、教育長からお話をいただきましょうか。

○片柳教育長 山極先生の著作の一つに、解剖学者である養老孟司先生との対談をまとめた『虫とゴリラ』という本があることを知りました。4年前になるそうですが、この養老先生も東久留米においでいただいているんですね。

その経緯を申し上げます。東久留米市には自由学園という、幼少中高大、この一貫教育を行う学校があります。24時間の生活全てが勉強という理念の下で寮生活をしていて、土を耕し作物を育てる活動を行っていると聞いています。「自然を相手に学ぶ」ということだと思います。この自由学園が養老先生をお招きしたということです。

水と緑に代表される豊かな自然を残す本市に、このたび山極先生をお招きすることができました。著名な学者のお二人にお越しいただくことができ大変光栄に思いますし、事務局としては少し誇らしく思っています。

○山極先生 ありがとうございます。私の娘は埼玉県の自由の森学園の出身なのですが、あそこも寮生活で、山の中にありますから自然と親しんで高校生活を送っていました。

養老先生とは昔からのお付き合いで、大変尊敬する方です。

今のお話をお聞きしていると、何か不思議な縁を感じます。

○富田市長 ありがとうございます。宮下委員お願いします。

○宮下教育委員 偉大な知識人である山極先生と養老先生のお二人が東久留米を訪問してください、そのことを教育長は誇らしげに語っていらっしゃいました。私も市民の一人として同感です。

私は、お二人の先生とは、自宅に届いた専門誌で偶然お会いしています。

先の見えない時代を自らが灯となって学びの道を照らすことを意味する「學燈」という言葉があります。明治30年、今から約127年前に「學燈」という書籍が創刊されました。ここに持ってきています（本を掲げる）。このたび発行元が変わったのですが、リニューアルされたその創刊号の夏号の巻頭に、養老先生が「今私たちが学ぶこと」というテーマで書かれていました。学ぶということとは何かという内容です。そして秋号は、なんと巻頭に山極先生の論文が掲載されていました。「共にある、共に生きる」というテーマで、「人の共感力」について書かれていました。

論文では次のように語っておられました。「これまで長い間、言葉を持たない猿やゴリラと付き合ってきた。そこで学んだのは『共にいる、共にある』という感覚で、時間とともに芽生えるものである」「人に慣れていない野生の日本猿やゴリラと友達になろうと努力してきた。共存感覚には身体の共鳴や接触が必要である。それを忘れずにこれからの社会を構成すべきである」と。論文を読みながら、私も強く共感をしたところです。

私も学生時代から自然科学を専攻し、教育現場にて多くの子どもたち、先生方、そして保護者や地域の皆さんとともに、自然に親しむ生き方の面白さ、楽しさや大切さを、学びを通して共感し合ってきました。その後、大学、大学院で多くの学生を指導し、動的な自然観に立つ理科授業の構築に努め、多くの人材を社会に輩出してきました。しかし、私を含め彼らの多くは、社会に出るとさまざまなことに苦慮しなければなりません。例えば、教員になったばかりの若い先生の多くは、不登校、長期欠席、いじめ、暴力等の多くの問題の解決に悩まされます。これらの問題は社会変化とともに質的な違いや統計的な観点による違いが見られますが、なかなか解決策が見つかりません。時代が変わっても発生率は増える一方です。

この問題の解決に公約数があるとすれば、それは「共存感覚」というキーワードが重要で

はないかと感じています。不登校やいじめの問題を先生はどのように感じておられるかを伺いたいと思います。

先生の著書である『スマホを捨てたい子どもたち』を拝読しました。絶え間ない技術革新の弊を集めた便利なスマホに視点を当てながら、実は子どもたちは生きづらいのだ、スマホでつながることに不安を感じているのではないかと捉え直しておられます。今の子どもたちを取り巻く社会状況にぴったりではないかと強く感じました。

ご講演の中でこれらの問題へのご示唆をいただければと思います。

○山極先生 本当にいろいろお読みいただいたんですね。ありがとうございます。

今のお話を伺っていて、「時間」という問題についてお話したいと思います。

われわれは自然と付き合うと、今と異なる時間と付き合えます。木の時間、虫の時間、鳥の時間、動物の時間などいろいろな時間がありますが、そこに合わせることによって自然を感じることができます。しかし、今は人間がつくった都会の時間だけに合わせていますから、身体が悲鳴を上げていると思います。「工学的な時間」とも言えますが、まさに産業革命以降にできた時間感覚で、私たちに合わなくなってきていると思います。

子どもたちの「不登校」についてもお話します。

国民国家の成立以来、国家に従順な若者を育てることが教育の大きな目的でしたが、今は合わなくなってきています。今は、子どもたちが自分たちの能力を伸ばすことを奨励されています。「自己責任」「自己実現」という標語に表れているように、「自分が、自分が」という意欲を持つことを意識づけさせられる教育を受けています。学校は相も変わらずカリキュラムがあり、子どもたちが一斉に答えを見つけている状況です。そういう学校教育自体が、今の子どもたちの個性を伸ばす教育には合わないのではないかと考えています。

子どもたちは非常に狭い、小さい世界の中で暮らしていますから、小さな集団の中では「いじめ」は起こります。閉ざされた世界にやり切れなくなって「その世界から逃げ出したい」「友達との関係を切りたのに切れない」という、逃げ道がなくなっている状況にあります。それが今度はフリースクールやオンライン教育に逃げ道を求め、特化し始めている。本当に今こそ、「教育」について考え直さなければならない時代に来ていると思います。

○宮下教育委員 ありがとうございます。

○富田市長 ただ今のお話は市内の小・中学校や教育委員会の中でも、さまざまな角度から議論してほしい内容だと思いました。尾関委員、お願いします。

○尾関教育委員 東久留米市も属している東京都市町村教育委員会連合会の研修会でも山極先生のお名前が挙がっていました。先駆けて東久留米市に来ていただきありがとうございます。

私は新聞記者を定年で辞めた後の10年間は明治学院大学などで客員教授をしていましたが、教育委員としての発言については教育の専門家というより、あくまで市民目線でするように務めています。そういう点から三つ伺います。

大学ではマスコミ論のほかに広報メディア論も教えていましたが、山極先生は京都大学の総長になられて「トップ広報」を実践されていました。国際拠点になるべく、大学の改廃やイメージアップを考えておられたと思います。大学の広報はおしなべて上手いかないケースが多いようですが、総長として大学のイメージアップに功績がおありでしたが、何に留意されたのでしょうか。二つ目です。アフリカとの関わりの中で現地学生の招聘などを通じて、「日本の教育力こそ誇れるものである。外交力においては経済力や技術力よりも教育力の高さを示すべきだ」と言われていました。日本の教育力の中で、特に公立の小・中学校はどこが優れているのか、伺います。三つ目です。高校と大学のギャップの問題です。学生は大学

に入ってきて一つの回答だけを求めているというご指摘がありました。私も大学で教えて、マスコミ論に一つの回答はないということで、レポートだけでテストはしませんでした。京都大学では教える側と教えられる側のギャップを埋めるのにテレビ番組の話などもされていた記事を読みましたが、何が一番効果的なのか伺います。

なお、文科省の大学法人化政策についてもこの場でご見解をいただくのは難しいと思いますが、本当は伺いたかったです。

○山極先生 総長の時に行ったことは、国内に対しては「自由な学風」を宣伝しました。大学というところは自学自習ですから、有名どころの教授陣が揃っていたとしても、本人自身が学ぶ気がなければどうしようもない。京都大学は学ぶことに関しては自由な発想を重んじています。

また、国際的には同窓会を利用しました。京都大学はかなりの留学生を輩出していて、世界でたくさん活躍しています、特にアジアでは。そういう人たちをフォローアップしながら、同窓会組織をたくさんつくって国際拠点を増やしました。私は五つぐらい増やしました。アフリカにも、アメリカにも二つ拠点を増やしました。京都大学という名前は日本では知られているかもしれないが、国際的にそんなに知られているとは思えないので、どういう大学かを同窓生を中心に広げてくれるようにしたということです。特にASEAN諸国の優秀な学生はほぼみんなアメリカに取られていましたが、それを日本に引っ張ってくるために、「日本語はできなくてもいい。日本に来てから半年間は日本語を勉強してほしい。4年間で卒業するまでにはほかの日本人の学生と同じように日本語で講義が受けられるようになろう」ということで、高校を回って優秀な学生を引っ張ってきました。生活費を支給し、授業料は無償という特別待遇です。そうすると、本当に優秀な学生が集まりました。それに日本人の学生も刺激を受けて、相乗効果がありました。これはとてもよかったなと思いました。

日本の教育力の高さについてです。日本の小・中学校に通う子どもたちは、答えをすぐ見つける能力が非常に優れています。とりわけ数学、算数の能力が非常に高いです。しかし、帰国子女は押しなべて算数、数学になると点数が低い。そのため、日本のいわゆるいい大学に入れない。だからわざわざ帰国子女枠を東京大学も設けているぐらいです。

能力が高かった子どもがなぜ高校、大学へと進学すると能力が落ちていくのかというと、要するに自分で自分の考えを発信する教育を受けていないからなんです。

あらかじめ決められた問いに対する答えを見つける能力はあるが、自分で問いを立てられない。さらに、相手を挑発して議論をつくるというテクニックを身に付けていない。高校や大学で、「自分で問いを立てて解いていく、議論をつかっていく」ということができない。オックスフォード大学やケンブリッジ大学ではそういう能力をチューター※がついて育てるのですが、そういった文化についていけないのは、国際力の低さの表れでしょうね。

私は大学生に「自分で問いを立てるようになれ」と話をしています。議論の中で新しい答えを見つけていくという論点の立て方が本来の問いの立て方であり、本来、勝ち負けはないです。ディベート※には勝ち負けがありますが、ダイアログ※はそうではない。最初にぶつかった意見と違う問いと答えを見つけることが議論の成果ですから、ダイアログをやりなさいと学生には話をしています。

※チューター…新たに入ってきた人をサポートする存在。

※ディベート…特定の論題について異なる立場に分かれて議論をする手法のこと。

※ダイアログ…対話または会話のこと。

大学というところは、それぞれが違う道を進みながら一緒に歩むという場所です。だから違う道を歩むということは違う問いを立てられる能力を持っているということであり、議論をするということは自分とは個性の違う仲間との間で「想像力」を身につけるということだから、それを一生懸命やりなさい、と言っていました。

法人化の問題についてはまた別の機会に話をします（笑）。

○尾関教育委員 今のお話は非常に分かりやすかったです。ディベートとなるとどうしても勝敗になるので、勝敗はないということを教えていかなければいけないと思いました。

○山極先生 一言だけ触れておきます。日本国憲法第23条は大学の自治を認めています。大学の自治は「研究」「教育」「人事」の自由です。この三つが守られなければ大学の自治とは言えない。しかし、今、閣議決定されたことが国会で審議されようとしています。例が悪いが、中国的になりつつあると思います（笑）。

○富田市長 かなり深い話になってきました。植村委員、お願いします。

○植村教育委員 私はこの10月に教育委員になったばかりです。小学校の教員として長く務め、今は心理士として学校を回っています。

その立場から、山極先生のこれまでの学びについて関心がありましたので伺います。先生は国立市の公立小学校から中学校に、高校は地元の都立国立高校に進まれました。となると、大学も地元の国立大学に進学されるのかなと周囲は思っていたと思いますが、国立市にある一橋大学ではなく、京都大学に進学されていますね。

京都大学に進学されたのは、高校3年生の時に「自分を変えるには切磋琢磨する必要がある」と思われたことと、「湯川秀樹先生に学びたいから」と書かれていた記事を読みました。「変身」できたのか伺いたいです。

○山極先生 ありがとうございます。僕は高校時代を通じて、受験勉強をほとんどしたことはないです。本当です、高校紛争があったからということもありますが。

京都大学を選んだ理由は、「教科書を勉強していれば必ず京都大学に入れる」と、京都大学の学生から聞いたからです（笑）。京都大学の試験問題をつくる立場になってみて実際そうなのですが、教科書で習わない問題は出しません。私立大学は別として、教科書を勉強してさえいれば東京大学、京都大学にも入れるはずなんです（笑）。僕がやった勉強方法は「教科書を書き直す」ということです。歴史も地理も数学も、教科書に書いてあることを自分なりの考えで書き直すことをやりました。それが私の勉強でしたね。

大学に入ってから「私は一体何を考えているのか」を自問自答していました。「常に自分の外に立ってものを考える」「自分を見つめる」ということを余儀なくされました。大学院に進んでからは、「人の言っていることで勝負するんじゃない」「自分で見たこと、自分で考えたことで勝負せえ！」ということを徹底的に仕込まれました。それは国際的な舞台に立つと非常に実感します。結局、問い詰められるわけですから。「なぜ君はそういうことを考えたのか。それは一体何を意味しているのか」と。「サルトルが言ったから」「ニーチェが言ったから」なんて言っても通用しません。駄目です。「山極が考えたこと、山極が経験したことからこういう発想が出てきた」と言わないと勝負になりませんから、徹底的にたたき込まれました。自分でも「これが自分をつくることになるんだな」という気がしていましたね。

先ほどのご質問にも繋がりますが、「なぜ日本の大学生の学力が落ちているように見えるのか」というと、自分で考えていることをきちんと言えないからです。「勉学」とは、本来、そういうことができるようにするものだと思います。知識としていろんなものを仕入れたと

しても、自分が考える営みを忘れたら学びにはなりませんから、そこは私が“変身した”ところかなと思います。

○植村教育委員 ありがとうございます。

○富田市長 宮下委員、お願いします。

○宮下教育委員 私も、「日本の教育は正しい答えの世界の中に、早く子どもたちを入れることに励んでいた」のではないかと考えています。金平糖は棘（とげ）がいっぱいありますが、その棘と棘の間をできるだけ埋めていこうというような教育をしてきたのではないかと。これからは、伸ばしたい棘を伸ばすことができる教育が必要だと感じています。

都立高校の話が出ましたが、都立高校がにわかに変わりつつあります。先ずは男女別定員制度の全廃です。今の中学3年生から変えるようですが、また、都立高校でもハイレベルの国際感覚を育てようということで、国際バカロレアのコースをつくっています。都立高校も公立の学校であるが大きく変わってきていることを、市内の公立小・中学校にもっと広めていってもいいのかなと感じています。

○富田市長 おっしゃるとおりですね。

○山極先生 そうですね。「高校」は大きく変わりつつあります。N高、S高※という学校種を聞いたことがあると思いますが、もはやN高は学生数2万5,000人を超えました。茂木健一郎氏が主宰している「屋久島おおぞら高校」は1万人を超えました。授業はほとんどオンラインで行われています。学生の身に立ってみれば、「好きな時に好きな場所で勉強できる」ことが自由だと思っているわけです。

もう一つ言えば、学力以外は能力主義になってきています。小さいころからお金をかけてピアノやバイオリン、スポーツなどを習わせて海外に留学させ、鍛えれば世界の舞台に若いころから立てる。大谷翔平くんみたいに、勉学ではなく、そういう世界を目指す子どもたちが増えつつあります。学力が高く、東京大学に入って財務省に入ったとしても給料は安いし、その人生は本当に面白いものかどうかという疑いが、子どもたちの間に始まっています。東京大学や京都大学という一流校を出たとしても、どこの会社に入っても初任給は変わらないですし、年功序列でだんだん増えていくという、今の旧態依然たる日本の雇用システムでは浮かび上がれないですから。それだったら面白い友達をつかって、自分でベンチャーを起業した方が楽しいかもしれないと。東京大学も今では文一よりも文二の方が偏差値は高くなっています。ビジネスに生きがいを見出す子どもたちの方が増えています。

また、留学組が増えていますね。これは受験産業が留学を勧めているからでもあります。イギリスのボーディングスクール※が3校も日本へ進出してきました。年間1,000万円ぐらいの学費がかかりますが、富裕層はそういうところに子どもを入れて、日本の大学ではなく、ケンブリッジ大学やオックスフォード大学に入学させようとしています。

そのような動きが出てきていますから、日本の高校は「日本の学生だけを対象にしていたらいい」という時代ではなくなってきています。高校でさえ、もっと国際化を意識していく必要があります。なおかつ、日本の高校は日本の大学への進学率やランキングだけを気にしてはいけません。もっと高校の時から、外に目を向けていけないといけません。学生たちは既に外に目を向け始めていることに、先生たちは気がつかないといけませんということです。

※N高・S高…いずれも全日制と同じく高校卒業資格を取得できる、インターネットを使う通信制の高校。N校とS校はスクーリングの日程や本校スクーリングの場所が異なる。

※ボーディングスクール…寮制学校のこと。全寮制インターナショナルスクール（英語公用

語)と全寮制スクール(現地語)の種類がある。

国際バカロレアはその一つの窓口だと思います。

○宮下教育委員 それを都立高校が始めたということは、日本の高校が本当に変わろうとしているのではないかと強く感じました。

○山極先生 私もそう思います。

○富田市長 本当に質問が尽きません。講演前にあれもこれも先生のお話を伺いたいです。私も中学生と小学生の子どもがいますので、日本の教育はどうなっていくのか、大いに関心があります。先生からお話があったように、「自己実現」「自己責任」「自分らしく生きていい」と子どもたちは投げかけられていて、そのこと自体はすごくいいと思います。古い常識の枠の中で生きろと言われるよりも、自分らしく生きなさい、あなたらしく生きなさい、夢を持ちなさいと言われて育つ子どもっていいな、と思います。中学校の卒業式に参列した時に、「何々先生のような学校の先生になりたいです」と壇上で将来の夢を語る姿を見てきましたが、そういう子どもは幸せだと思います。

一方、小・中学生の時に自分らしさを求められても、「自分って何だろう」と、まだまだ解答を見つけられない問いを持つ子どもたちもたくさんいると思います。正解をきっちり教えられている今の学びの中で、急に「正解は幾つあってもいいんです」「自由に生きていいんだよ」と言われても、どうしていいか分からない子どもたちもいると思います。そういう子どもの方が多いのかもしれない。

義務教育課程の中で育てている小・中学生の子どもたちに対して、教育委員会でできること、地方自治体でできることのヒントがあれば教えていただきたいと思います。

○山極先生 今は、いわゆるロールモデル※がないです。要するに「VUCAの時代」、Volatility 変動性、Uncertainty 不確実性、Complexity 複雑性、Ambiguity 曖昧性と言われていますが、その未来を確実に生き抜かれるような、手本となるいいモデルをわれわれの世代は持ってないので、若者にとっても私たちにとっても今も将来も未知数なんです。

未知数であることを知ることが重要だと思います。

○富田市長 私自身も自分の経験を基に未知数の部分も加えていきながら、子どもたちと向き合っていかなければいけないと思います。

私は総合教育会議の後、小学校に行って、子どもたちと触れ合って共感力を高めるためにも「東久留米音頭」を踊ってきます。先ほどの先生のお話でも、そういう時間を共有することも大切だということでした。

教育長、お願いします。

○片柳教育長 講演の露払いとして、一言発言させていただきます。「人間は社会的な動物としての特徴を強く持つ」と言われます。私は、こうした人間社会の基盤となっている能力に、山極先生のおっしゃる「共感力」があるのだと捉えています。「共感力」を私なりに言い換えると、それは「相手意識を持つ」ということと捉えています。子どもたちのケンカや諍(いさか)いを指導するときに、「相手の気持ちも考えなさい」「相手の立場にもなってみなさい」と諭すことがよくあるので、やはり「共感力を育てる」ということが教育の重要な営みの一つであることが分かります。

この後、山極先生から「人間にとって学びは何か」というテーマでご講演をいただくわけですが、これまでの議論の中にも出てきたように、学校教育では子どもが自発的、自主的に学習に取り組めるようにする。そういう子どもたちを支援するということが求められていま

※ロールモデル…行動や考え方を真似る対象になる人。「お手本となる人物」のこと。
す。子どもたちの学びを組み立てる上で、そもそも人間にとって学びとは何かを改めて考えることは、大変大きな意味のあることだと思います。

「リスキリング」や「学び直し」が大人にも求められる時代になって、この後の山極先生の話は大いに参考になるはずだと思っています。

○富田市長 ありがとうございます。

駆け足になってしまいましたが、第1部についてはこれをもって終了させていただきます。

ここで5分間休憩を取りまして、9時50分から第2部のご講演に入らせていただきます。

(休憩 午前9時45分)

(再開 午前9時50分)

(2) 講演「人間にとって学びとは何か」

○山極先生 「教育」は人間独自のものです。人間以外の動物には「教育」という行為は見られません。唯一見られるのは、ハンティングをする肉食動物か、猛禽類だけです。ハンティングというのは技術が要るので、これは自己犠牲を払ってでも子どもに教えないといけない。チンパンジーは非常に高い知性を持っていて人間に似ていますが、チンパンジーでさえ教えるという行為は先ず見られません。

「教える」とは一体何なのか。動物には「教示行動」があります。これには条件が二つあります。一つは、自分と相手の間に知識や技術の差があることを双方が理解していること。そうしないと知識が移行しません。もう一つは、これが重要ですが、教える側は自分の不利益を承知で相手に伝えようとすることです。ライオンの母親は自分の子どもに、自分がせっかく捕まえた獲物をわざわざ放して追いかけさせます。獲物が逃げちゃう可能性もある。その場合は自分の損になるわけじゃないですか。でもそれを承知で教える。これが「教示行動」です。

何で人間だけに「教育」という行為が発達したのか。それは、私が調べてきたゴリラと人間の子育てを比べてみるとよく分かります。それを今日はお伝えします。

ゴリラは大人になると雄は200kg、雌は100kg超えますが、産まれた時は1.6kgしかない。すごく小さいです。3年間、4年間、赤ちゃんはお母さんのおっぱいを吸って育ちます。お母さんは1年間赤ん坊を腕から離しません。だから赤ちゃんは泣かないです。すごくおとなしい。でも人間の赤ちゃんは太っていますね。3kgを超えるのが普通です。そして、赤ちゃんはよく泣きます、うるさいほど。大きな体で産まれてくるということは成長して産まれるのかと思ったら大間違いで、お母さんに掴（つかま）れないほどひ弱だし、成長も遅いです。でも乳離れは1年、2年で、お乳を吸うのをやめます。

何か変なことが起こっていると思いませんか。これはゴリラだけではありません。人間に近い類人猿と呼ばれているオランウータン、チンパンジーもそうです。乳児期、少年期、青年期、老年期とみんなあります。でも長さが違う。人間以外の類人猿は乳児期が長いです。しかし、離乳した時に既に永久歯が生えているから、大人と同じものが食べられるし、少年期にすぐ移行できる。しかし、人間の赤ちゃんは6歳まで乳歯です。永久歯は生えてこない。だから本当は6歳までおっぱいを吸っていいのに1~2歳で離乳し、「子ども期」という変な時期が紛れ込んでいます。そのため、乳歯でしか食べられない物をわざわざ運んでき

てやらなくてはならないのです。何でこんなコストを払ってまで「子ども期」をつくったのか。それから「青年期」という時期は繁殖能力がついているのに、繁殖をしない時期、できない時期があります。そして老年期が長い。この三つが合わさって、人間の社会がつくられています。

何で人間の赤ちゃんは乳歯のうちに離乳するのか。それは子どもをたくさんつくるためです。人類の祖先だけが類人猿が住んでいる熱帯雨林を離れて、危険な草原へ出てきました。初期の時代は肉食獣にやられて子どもがたくさん殺された。その子どもを補充するため、たくさん子どもをつくる必要があったんです。たくさん子どもをつくる方法は二つあって、一度にたくさん子どもを産むか、あるいは一産一子だけど何度も子どもを産むという方法があります。人間は猿や類人猿の仲間だから、一産一子で後者を選んだ。そのためには、赤ちゃんを早くからおっぱいから引き離して、おっぱいを止めて母乳の産生を促すプロラクチンというホルモンを止める。このホルモンがあると排卵が抑制されちゃって、次の子どもを産めないのです。だからおっぱいを止めたのですね。そのために早くから離乳しなくちゃいけないなくなっちゃった。

何で重たい赤ちゃんを産むのか。脳が大きくなり始めたからです。太った赤ちゃんのあの太った部分は、分厚い体脂肪です。ゴリラの赤ちゃんの体脂肪率は5%以下で、人間の赤ちゃんは15%~25%もあり、丸々と太っています。あの脂肪は脳に過大な栄養を送らなければならないから、その**バッファー**※なんですね。栄養が行き届かないと脳の成長が止まるから、そういう場合には脂肪を燃やして栄養を補給するように、分厚い脂肪に包まれて産まれるようにしているわけです。人間の赤ちゃんの脳は生後1年間で2倍になります。ゴリラの赤ちゃんは4歳で2倍になって大人の大きさに達する。人間の赤ちゃんは12歳~16歳までに徐々に大きくなって行って完成します。子どもの成長が遅いのは、脳に優先的にエネルギーを送るからです。身体の発育を遅らせちゃったわけです。

その結果、何が起こるかという、「思春期スパート」という現象が起こります。産まれた直後は身体の成長が速い。でも脳にどんどんエネルギーを取られるので身体の成長は遅れ、5歳で緩やかになって12歳~16歳で脳が完成すると、今度はエネルギーを身体の成長に送ることができるようになって、身体の成長速度がアップします。女の子が2年早く、男の子のピークが高い。

思春期スパートは脳の成長に身体が追いつく時期で、その時には繁殖力も社会力も身につけなければいけない。ちょうど日本では今の中学から高校に当たる時期で、これは非常に難しい時期です。

産まれた直後は死亡率が高いです。でも親離れした時からどんどん死亡率が下がります。そして10歳を超えて親の目が行き届かなくなると、死亡率が上がり始める。そして先ほどの思春期スパートを越えた時期ぐらいに、男の子も女の子も死亡率がぐんとアップする時期があります。この時期が危ないです。思春期は脳と身体の成長のバランスが崩れて事故に遭ったり精神的に病んだり、病気にかかったり、大人とのトラブルに巻き込まれて死亡する確率が高くなるのです。

※バッファー…余裕、ゆとりのこと。

2001年の厚生労働省のデータがありますが、時代が変わってもこのピークの位置は変わっていません。国を変えてもこのピークの位置は変わらないという結果が出ています。ということは、これは時代や文化を表すのではなく、人間の生物学的な成長を表しているグラフということです。

だから、人類の進化史はこう言い表すことができます。700万年前にチンパンジーとの共通祖先から生まれて、先ず初めに獲得した人間らしい特徴は、立って二足で歩くことであったと。これで何をしたかという、食物を運んで安全な場所でみんなで食べたんです。共食が始まりました。そしてサバンナに進出することができ、そこで大型の肉食動物に子どもを殺されたから、たくさん子どもをつくる必要に迫られた。そして200万年前に脳が大きくなり始めると、今度は脳に過大なエネルギーを送る必要が出て、頭でっかちな成長の遅い子どもをたくさん持つようになり、共同保育が必要になった。ここで家族と複数の家族を含む共同体が生まれたと、私は思っています。

人間の子どもの特徴は、離乳の時期と思春期スパートの時期に危ない時期を迎えることです。この時期は親だけでは支え切れなくて、親以外の保育の手が必要になったということです。その結果、家族と複数の家族を含む共同体という、重層構造の社会ができました。今でも、われわれはこれを踏襲しています。これは類人猿にはできなかつた。なぜかという、家族と共同体というのは編成原理が拮抗するからです。家族は見返りを求めずに奉仕し合う組織です。でも、共同体は「互酬性」と言って、何かしてあげれば見返りが来る、そういう組織です。これは相反してしまう。だから、ゴリラは家族的な集団しかつくれなかつたし、チンパンジーは家族がなく、共同体的な集団しかつくれなかつた。人間はこれを両立させることができた。それは共同保育を通じて共感力を高めたからです。

そして、それによって実は人間にしかない社会力を身につけられた。その社会力は何かという、自己犠牲を払っても集団のために尽くすという能力です。これがすごく大きかった。だからこそ自分の集団をいったん離れても、また自分の集団に戻ってくることができる。普通、動物は自分の利益が落ち始めたら集団を離れます。いったん離れたら自分の集団へ戻れない。ほかの集団にも入れないのが普通です。でも人間は、皆さんもそうですが、毎日のようにいろんな集団を渡り歩いて、また自分の集団へ戻ってくことを繰り返しています。それができるのは、それぞれが集団のために尽くすことができるという能力を認め合っているからだと思います。

学びに重要な時期は、こういう観点からすると、離乳期と思春期スパート、これを終えて一般社会に認められるような社会的能力をつくる時期がある。完成期は大学です。思春期スパートは、中学から高校です。離乳期は小学校に上がる前です。それぞれの脳の発達の時期に、自分と他者の関係を見極めて社会に適応しなければなりません。子どもが成長する過程です。そして、共感能力の発達によって、人間の子どもはほかの動物の子どもとは違う能力を身につけたのです。

それは何か。「憧れを持つ」ということです。イチローさんとか、湯川秀樹さんとか、そういう有名な人の中に自分の将来を見るんです。それに向かって目標をつくり、歩み始める。それが大人たちに分かるものだから、「前に立って導き、後ろに立って背中を押して」ということが起こるわけです。「教育」というのは、言ってしまうと「究極のお節介」です。母

親と子どもにしか、動物では教育なんて起こらないわけです。しかも、肉食か猛禽類だけです。普通の猿や類人猿は教育しません。子どもが勝手に学ぶんです。目標をつくりません。なるようになっていくだけです。ところが人間の子どもだけが目標を持って、それを親以外の人たちが一生懸命手を出して教えるということを始めました。

そしてもう一つ、何でそういうものが重要になったのかというと、「音楽的コミュニケーション」が言葉の前にあったと、私は思っています。人間の赤ちゃんは重たいですね。だからお母さんは抱き続けることができなくてどこかに置く、あるいは誰かに預けます。そのため、お母さんあるいはほかの人は、泣き始めた子どもをあやす時に音楽的な声を使うという説があります。それが「インファント・ダイレクテッド・スピーチ」という会話です。これはピッチが高く変化の幅が広く、母音が長めに発音されて、繰り返が多いという、世界共通の特徴を持っています。赤ちゃんは言葉で幾ら話しかけても、言葉の意味を理解できません。だけど絶対音感の能力を持っているから、そのトーンやピッチを聞いて安心してくれる。そして、このインファント・ダイレクテッド・スピーチ、赤ちゃんに語りかける言葉というのは、誰もが生まれつき話しかけることができる能力なのですね。それが大人の間にも普及して、音楽的なコミュニケーションが成立したという仮説があります。

その結果、あたかもお母さんと赤ちゃんの間に生じるような効果が生まれました。それは何かというと、お互いの壁を乗り越えて一体化しようという能力です。今でも音楽はそういう効果がある。そのために、一人では乗り越えられない艱難辛苦をみんなで乗り越えていこうという、音楽による効果が生まれました。これが人間が持った社会力です。

人間の脳はゴリラの3倍大きいです。何で脳が大きくなったのでしょうか。「言葉をしゃべり始めていろいろなものに名前を付けて物語にして仲間と共有し、それを記憶力として脳に収めなくちゃいけなくなったために容量を増したのだろう」と思っている方もいます。確かにそれは間違いではありません。でも研究者は疑ってかかります。ほんまやろうかと。

「言葉」は今から7万年から10万年ぐらい前に出てきたと言われていています。脳が大きくなり始めたのは200万年前です。そのころ、人類はまだ言葉をしゃべっていなかった。でも脳は大きくなったのです。そして、現代人並みの脳容量が達成されるのは、現代人より二つ前のホモハイデルベルゲンシスという化石人類です。このとき既に1,400ccの脳が達成されています。その後に出てきたネアンデルタール人は、現代人よりちょっと大きめの脳を持っていました。現代人は20万年前に出てきましたから。だから、言葉をしゃべり始めたことが脳が大きくなった原因ではなくて、脳が大きくなったことが言葉をしゃべることにつながったというのが、正しい解釈です。

では脳はどのような理由で大きくなったのでしょうか。

これには非常に面白い仮説を出したイギリス人のロビン・ダンバーという人がいます。脳は新皮質と旧皮質の部分に分かれています。その比率を取ったのです。新皮質比が高い方が脳が大きい。もう一つ、それぞれの種が暮らす平均的な群れの規模、集団のサイズです。大きな集団で暮らす種ほど脳が大きいということが分かりました。大きな集団で暮らすということは、仲間の数が増えて、仲間同士の関係や仲間と自分の関係をよく記憶しておく方が上手く生きられることを表しているのです。脳は社会脳として容量を増す必要があったという結果になります。

その相関係数を利用して、今度は化石人類で脳の大きさを推定できるものから、当時の人類の集団規模を表してみました。200万年前に脳がゴリラの脳より大きくなり始めました。それ以前はゴリラの脳とほぼ変わらなかったのだから、現代のゴリラの集団サイズ、10人～20人を当てはめています。200万年前に脳容量が600ccを超えたぐらいで30人になり、50人になり、そして現代は150人ぐらいの集団で暮らすのに、現代人の脳は合致しているという話になりました。

これは実はとても面白いのです。現代でも農耕牧畜という、食料生産をせずに自然の恵みだけに頼って暮らしている人たちを「狩猟採集民」と言います。その狩猟採集民は移動生活をしていますが大体150人ぐらいの集団で暮らしているという、世界中の報告があります。だから7万年～10万年ぐらい前に言葉をしゃべり始めたとしても、集団は大きくならなかったということです。農耕牧畜が始まる1万2,000年前までは。

そしてもっと重要なことがあります。農耕牧畜が始まって食料生産を始めてから、人類は徐々に集団を大きくしました。現代では何千人、何万人という社会でわれわれは暮らしています。だけど、脳は大きくなっていないのです。どこかで脳と集団サイズの相関関係は崩れてしまったということが言えます。そして重要なのは、人類が進化の過程でつくり上げてきた集団の規模とコミュニケーションのタイプは、現代でも残っているということです。

例えば、ゴリラの集団サイズである10人～15人、これは20人でもいいのですが、これを、身体を共鳴させてつくる集団と言っています。これは現代で言えば何でしょう。スポーツです。ラグビーは15人で、サッカーは11人じゃないですか。それ以上のスポーツというのはあまりないですよ。これは実は言葉は要らないです。練習の時は言葉で解説し合っているかもしれないが、いざ試合になったら言葉をしゃべる余裕なんかありませんから、目くばせ、手振り、身振り、そういったもので仲間に自分の意図を伝え、仲間は即座にその意図を理解して適切な行動を取る。それが合わさってチームになる。チームワークになるでしょう。相手もそうです。原則として言葉は要らない。言葉をしゃべらないゴリラだって、群れが一つの生き物のように動くことができるわけですから、そういう能力を現代人も持ち合わせているということです。

「30人～50人」とは一体何なのか。人類の脳が大きくなり始めたころです。それはすぐ皆さん頭に浮かぶと思いますが、学校のクラスです。毎日顔を会わせているから、顔と性格が一致していて、誰かが欠けたらすぐ分かる。全体像がみんなの頭の中に入っているわけです。誰かが動き出したら、この集団はかろうじて分裂せずについていける。だから、学校の先生が一人でクラスをコントロールできるわけです。学校のクラスだけではありません。宗教の布教集団、軍隊の小隊、そして会社で言えば課や部の数がこれに当たる。コントロールできる数なんです。

では、現代人の脳に匹敵する「150人」という数は一体何なのか。私は、社会関係資本、英語で言えば「social capital」に当たると思っています。「social capital」とは、自分で何か悩みを抱えたりトラブルに陥ったりした時に、疑いもせずに相談できる仲間の数です。そして、「150人」というのはその仲間の数の上限です。これを発見した人の名前をつけて「ダンバー数」と呼びますが、現代人の脳がこれに匹敵するということは、社会が拡大し

てもこのダンバー数は大きくなっていないということです。恐らくこれは、過去に喜怒哀楽を共にした、あるいは身体を共鳴させて付き合った人たちの間につくられるものです。だから、音楽と一緒に演奏したとか、歌と一緒に歌ったとか、スポーツと一緒にしたとか、ボランティア活動を一緒にしたとか、そういう身体を共鳴させて付き合った仲間がこれに当たります。そういうものだろうと思いますが、それがいったい、いつつくられるかが問題です。

それを日常生活に落とし込んでみると、共鳴集団の「10人～15人」というのは、家族あるいは親族になります。生まれつき一緒にいるから後ろ姿を見ただけで相手の気分が分かる、そういう間柄。それが10～15ぐらい集まって地域集団をつくっている。地域コミュニティをつくっている。この関係は「音楽的コミュニケーション」によって結ばれていると思っています。言葉じゃないです。

音楽的コミュニケーションは、例えば祭りのお囃子（はやし）、これが一つの例です。音楽そのものですから。だけどもっと拡大して考えてみると、例えばマナー、エチケット、身振り素振り、服装や食事。そういうものは、地域に根差した伝統や習慣によってつくられています。あるいは家並み、家の調度品、道なども人々の付き合いを自然の流れに沿って動かすようにできているはずです。それを「音楽」と呼ぼうというわけです。ここに「言葉」は必要条件として存在していません。その外にいろんなビジネスや交渉をするために言葉というものが必要な人たちがいる。でもそれは、信頼すべき仲間にはなっていないわけです。

では、言葉の前にどんなコミュニケーションがあったのか。これは言葉を駆使して暮らしている私たちには想像できません。それは言葉を持っていない猿や類人猿が教えてくれます。猿と類人猿の間に大きな断絶があります。日本猿は向かい合うことができません。相手の顔を見つめるのは、強い猿の特権だからです。弱い猿は見つめられたら視線をそらさなくてはいけない。しかし、ゴリラは顔を近づけて向き合います。これが違います。ゴリラだけじゃありません。オランウータンもできるし、チンパンジーもできます。けど猿にはできない。

人間も、ゴリラやチンパンジーの仲間ですから向き合うことができる。皆さんも今日何人もの方々と向き合ってきたと思います。でも、人間の対面の仕方はちょっと違いますね。1mぐらい距離を置くのが普通です。何で距離を置くのでしょうか。多くの方は「それはしゃべるからだ」と言われると思います。確かに向き合ったらしゃべりますが、研究者はまたここで問いを立てるわけです。「しゃべるというのは声を出して意味を伝え合うコミュニケーションである。後ろ向きだったって声は聞こえる。横を向いていたっていいのになぜ正面から向き合うのか」と。

その答えを私の同僚たちが調べてくれました。日本の動物園をずっと回って、猿と類人猿の目を写真に撮りました。向き合うということでは、類人猿は人間に近かった。だけど、類人猿の目はみんな「猿の目」をしています。人間の目だけが違う。何が違うかということ、「白目」がある。この白目があるおかげで、向き合ったら1m離れると、相手の目の微細な動きを捉えることができます。その動きからわれわれは相手の気持ちを読んでいます。

しかも重要なことは、目の動きから相手の気持ちを読むという能力は親から教わったことではないはずだし、学校でも教えてくれないということです。人間は生まれつきこの能力を持っています。しかも相手の気持ちを読むということに役立てるとすれば、それは共感力を高めるためにこの目が出現したということを表しています。恐らくわれわれは類人猿と同

じ対面交渉から出発して、食の共同と子育ての共同を通じて音楽的コミュニケーションを高め、そしてそれを相手の気持ちを読むだけではなく、相手の考えを読むという、これを「心の理論」「セオリー・オブ・マインド」と言いますが、そういう能力まで高めて、やっと言葉というものが創出されたと思っています。

その上で、共感力の上に言葉が出てきたことが重要です。「言葉」は重さがないですから、どこにでも持ち運びができる。遠くにあっても見えないものを仲間の言葉によって実感することができるし、自分が体験できなかった過去の出来事も、言葉によって再現することができます。そして、違うものを一緒にし、同じものを分類し、物語にして、それを仲間と共有する。実際には起こっていないことも虚構として作り上げることができるようになりました。これが「認知革命」です。言葉によって意味が付与され、時空間が一気に広がりました。共感と対話が結びついて想像力が拡大した。これが7万年～10万年前以降起こってきたことだと思っています。

しかし、今は「通信情報革命」が急速に進みつつあります。文字が5,000年前に出てきて、電話が150年前。インターネットが40年前に出てきて、今やSNSの時代です。そしてAI、アバターが活躍する時代になりつつある。世界の人口は80億を超えました。この100年間で世界の人口は4倍になりました。日本の人口もそうです。通信情報機器によってグローバルな社会ができました。つい最近、アンソロポシーン（人新世）という時代区分が地質学者によって提案されましたが、それは1950年代以降を指すという話になっています。

近年急速に人間の活動が増え始めています。われわれが重視しなくてはいけないのは、人間の脳の部分は「意識」と「知能」の部分によってできていて、これが分かちがたく結びついて人間の判断力をもたらしてくれたということです。しかし知能の部分、知識の部分は情報として外出しにされて、人工知能によって分析され、期待値をはじき出すような技術が今生まれている。これが人類の脳が大きくならなくなっちゃった理由だと思っています。

1万2,000年前に農耕牧畜が始まったころに比べて、現代人の脳は10%～30%ぐらい縮んでいるという証拠があります。われわれの脳は萎縮しています。人間の脳の中にあつた意識の部分は情報にならないから、脳の中に収められたまま直観力を発揮できる機会をだんだん失いつつあります。そのために、情緒的な社会性が失われつつあるのではないかと思います。考え直さなければならないのは、命と命のつながりです。

われわれは新型コロナウイルスに悩まされてきましたが、ウイルスは目に見えない。バクテリアも目に見えません。しかし、人間の腸の中には100兆個に及ぶバクテリアが共生していて、彼らによってさまざまな食物が消化され、人間の臓器あるいは精神状態まで左右されていると言われ始めています。そういう目に見えない生き物とのつながりを、もう一度考え直さなくちゃいけないと思います。その上で新たな人間の暮らしを営まなければならないようになってきています。

しかし、今は情報通信機器によって現実よりもフィクションに暮らし始めている。これが問題です。人間社会はゴリラ社会と比べると、「三つの自由」によって拡大してきました。

「移動する自由」「集まる自由」「会話する自由」の三つです。これが人間にとって一番重要なことだと思っています。というのは、人間は日々違うものに出会って気づかなければならないからです。人間はそうやって出会いと気づきを繰り返してきたからこそ、さまざまな発見

や文化を積み上げてこられたわけです。それがなくなったら人間はもはや想像力や創造力を発揮することができません。

ところが、コロナ渦はこの三つの自由を制限してしまった。「『対話する自由』はオンラインによってそんなには抑えられていないじゃないか」と言う人がいるかもしれませんが、オンラインは実際に会って対話する自由と比べると、非常に制限があります。とりわけ対面授業や芸術活動やスポーツやコンサートといったことがなかなかできなくなってしまったことは、重要な問題だと思います。一方で、気がついたこともあります。これまで非労働行為と言って脇に追いやっていた子育てや家事や介護が、人間が生きる上でとても重要だということも分かったし、オンラインで可能なこともたくさんあるということが分かった。お金の回り方も考え直す時期に来ています。地方と都市の価値も分かってきた。改めて人間の豊かさとは何かということを考えなければならなくなってきた。

そこで、IT時代の若者たちを考えてみると、『スマホを捨てたい子どもたち』の中で語ったことですが、「学校に行く理由があるのか」と子どもたちは考え始めています。必要な知識はインターネットで何でも得られますから。「知識は自分で得るものだ。人から教えられるものではない」と思っている。スマホによって仲間と常時つながっているから、自分一人になる時間がない。そのため、自己決定ができない。

つまり、知識はたくさん持っていて、スマホというデータベースによって何でも知識を引き出すことができるが、その知識を組み合わせる自分の考えを組み立てるという考える時間がなくなっている。特に、対面という生の交渉をするような社会的知性が衰え始めているのではないか、という懸念があります。

私が考えるグローバル人材は四つあります。まず、「状況を即断し適用できるか」。つまり、頭で考えるのではなく、体で考えることができなければ多分危機には対処できないでしょう。

そして「自己決定ができるかどうか」。自分の考えを自分で出すことができるかどうか。今後は今までとは違う想定外の出来事に直面することが多くなると思います。気候変動もそうです。だから「危機管理ができるかどうか、自分の身を守り仲間を守ることができるかどうか」、これは直観を鍛えなければならない。そしてもっと重要なことは「自分の考えを述べて、その考えに他者を引き込む能力を持てるかどうか。他者を感動させる能力を持つかどうか」です。これが特に重要だと思います。

現代の教育は知識を伝えるだけでは成り立ちません。知識はインターネットの中にあると子どもたちは思っていますから、既存の知識ではなく、まだ分からないことを教える必要があります。それは知識になっていない知恵です。そして、どうやって自分の考え方を紡ぐのか、どうやって手や足を動かすのかという実践の方法を教える必要がある。さまざまな経験を積むことが必要であり、われわれが進化の中で鍛えてきた「共感力」を使った学びの場を演出しなければならないということだと思います。

私は2014年に京都大学の総長になった時に、「大学は世界と社会に通じる窓だ」という標語をつくって、「Window構想」を出しました。Windowというそれぞれのアルファベットになぞらえて、二つずつ方針をつくりました。最初のWが私は一番好きなので

すが、Wild and Wise。頭だけ賢くなっちゃ駄目だよ。Wildという野生の心を持たなければいけない。野生の心というのは直観力です。そういうものを鍛えようということを始めました。

コロナ後の社会に必要なことと言えば、やはり感染予防をこれまで以上に意識しなくてはいいけないでしょう。しかし、家族は開かれてないといけない。家族が閉じたら先ほど言った家族と複数の家族を含む共同体という利点を生かすことができません。それを十分に意識してこそ、社会能力を子どもたちは持つことができる。対象と集団規模に応じた適切なコミュニケーションを考えましょう。小さな集団、大きな集団、どういう関係で仲間がつながり合っているのか。それぞれによってコミュニケーションのタイプが違うはずです。それを考えて行動しないと間違ったことになります。われわれは言葉と一緒に、通信情報機器を現代の技術として手に入れてしまいましたから、もはやそれを手離すことはできません。それをうまく使っていくことが必要です。

われわれは言葉によってコミュニケーションを取っていると思いがちですが、ゴリラとコミュニケーションをずっと取ってきた私の経験からすると、言葉は気持ちを伝え合うコミュニケーションとしては不適切です。むしろ言葉のないコミュニケーションの方が重要です。例えば、触れ合う、身体を共鳴させる、あるいは食事をする。これもコミュニケーションです。スポーツをする。音楽と一緒に演奏する。こういうのもコミュニケーションです。そういう方が気持ちを伝え合うためには重要だし、効果的ということも分かりました。

また、「文化」は風土によってさまざまな個性を發揮します。それを忘れてはいけない。つまり自然を破壊しどこでも同じような景観をつくってしまうと、文化の一元化を招来します。東京はどこでも同じような都市ですから、その土地の個性ある自然には出会えません。日本でも北海道、信州、沖縄に行けばその気候に合った風土が、その中で長年にわたって育まれてきた文化があります。その文化の中で人々は個性を磨くことができる。そういうことを子どもたちにも少し体験させなければいけない。だから「風土に合った生活のデザイン」を子どもたちと一緒につくっていくことが必要になると思います。

そういう中で、文化と文化をつなぐ、それが「言葉」です。その言葉によっていろんな多様な文化があり、それは甲乙つけがたいという価値観によって支えられていることを知るべきです。だからこそ三つの自由、「動く自由」「集まる自由」「対話する自由」が必要です。これをどうやって駆使していくかによって、人間社会が変わっていくと思います。

最後に、「学校は公共財である」ということを申し上げたいと思います。

「教育」は「贈与」です。子どもたちを引っ張っていくのが教師の役目ですが、子どもたちは教師の思うとおりになりません。子どもたちは教育される過程でさまざまな人を目標に定め、あるいは自分が将来描くような目標に向かって進みます。それをわれわれ教員は理解して、その子どもたちの個性を伸ばす教育をしなければならぬ。これまで以上に教員の数減らしてしまったら、大変なことになると思っています。一律な教育というのはやはり現代には合いません。子どもたちはそれぞれの段階でそれぞれの個性を發揮している。それをわれわれが認めて、子どもたちと一緒に学ぶことをしなければならぬ。子どもたちにとって新しいことは、われわれにとっても新しいことである可能性があります。

昔は、子どもたちにとって新しいことでも、上の世代にとっては決して新しいことではな

かったのです。江戸時代もそうです。平安時代もそうです。だからこそ、子どもたちはいろんな上の世代に学ぶことができた。しかし今は「サムシング・ニュー症候群」と言われるように、子どもたちにとって新しいことはわれわれの上の世代にとっても新しいことです。なので、一緒に学ばないと下の若い世代と分離してしまいます、あるいは無視されてしまいます、上の世代は。そして重要なことは動物の教示行動でも条件として現われていたように、教える側は直接的な利益を求めてはいけません。むしろ、自分が犠牲を払う姿勢を保たなければ、子どもたちはついてきてくれないと思います。

教育って贈り物なんです。贈り物をもらった方は自由です、それをどう使おうと。われわれはそれに条件を付けるべきではないと思います。

もう一つ、学校が公共財であるというのは、社会や世界に開かれているからです。閉じてしまったら公共財になりません。これからは学校という場所が子どもたちだけではなくて、地域の人たちにとっても大きなコミュニティになるだろうと思います。

そういう人たちが集いながら学校が持っているネットワークを利用して、社会や世界につながり、新たな学びができる。小学校でも中学校でも高校でも、まだ学びたいことがたくさんある社会人がやって来れる場所にしなければいけないと思います。新しいコミュニティに学校がなるべきだというのが私の考えで、大学もそう動き出すべきだと思っています。リカレント教育は、日本ではまだたった2%しか進んでいません。欧米では一学生のうちの20%は社会人なのです。多様な人々が集ってこられるコミュニティに海外ではなりつつあるのに、日本ではまだ大学すら学生が主です。一般の高校を出たばかりの学生が主です。もっと社会人が集って社会の課題を若い世代と上の世代の双方が寄り合って話し合う場にするべきではないか、と私は思っています。

本日はご清聴ありがとうございました。（拍手）

○富田市長 山極先生におかれましては大変お忙しい中、また限られた時間の中で貴重なご講演を賜り、誠にありがとうございました。

学校現場、教育現場、また地方自治体の現場においてもこれから考えていかなければいけない視点からお話を伺ったと思っています。とかく利便性を追求する社会、タイパ、コスパが主流になりがちですが、本来人間のあるべき姿は何かというところをいま一度考えていかなければいけないと感じました。

山極先生に改めて大きな拍手を送りたいと思います。（拍手）

◎閉会の宣告

○富田市長 これをもって、第2回の総合教育会議は終了とさせていただきます。昨年は大津のいじめの問題の解決に力を尽くされた前大津市長の越弁護士をお招きし、今回は前京都大学総長の山極先生をお招きできまして、本当に2年連続で大変有意義な時間を過ごすことができました。

私自身も地方自治の現場にしっかりと立ち、こういう場でお聞きできたお話を実践で生かしていきたいと思っています。ありがとうございました。

（閉会 午前10時29分）

東久留米市総合教育会議第8の規定により、ここに署名する。

令和6年1月17日

市 長

教 育 長